



TITLE:

摘録

AUTHOR(S):

CITATION:

摘録. 地球 1927, 8(6): 458-459

ISSUE DATE:

1927-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183362>

RIGHT:

摘 錄

○石原初太郎 本邦に於ける地質學軌近の進歩

(地理教材研究第十號)

新たに發行された二百萬分一日本帝國地質圖と共に其説明書とも見らるべき日本帝國地質鑛産が英文で發行されマドリッドに開催の萬國地質學會議及び東京で開催の汎太平洋學術會議に提示されたのを見ると、今日まで地質學上の過去三十年間に於ける我國學界の進歩の道程を總勘定した感がないではない、今この地質圖及説明書に現はれた要點を從來のそれに比べてみると、

一、本邦の地史系統に始原界は無くなつた

二、秩父古生層の上部及中部は二疊紀及石炭紀と確定され、地質圖中に秩父古生層の名稱は無くなつた

三、領家變成岩は二疊石炭紀層の變成したものである、

四、本邦の古生界の面積は二十八年前に全面積の一二・七%であつたが、今度は一六・四%となつた

五、御阪層は第三紀中新統と決定された

六、新らしき地質圖には三紀層を新舊の二種に分けてある

七、聞き馴れぬアルカリ岩類が、火成岩中に加はつた隱岐の Normarkitic Syenite Comendite の類である

八、新たに説明書にのせられた本邦地史系統表は、現今の學

者間の輿論の歸着點である、(F)

○今村朝八瀬大原の朝鮮色 (朝鮮十月號)

古來より日本へは朝鮮から多數の移住民があり、又朝鮮の風俗で、日本に傳つて居るものが頗る多い、八瀬大原に朝鮮の風俗が残つて居たとて別に取立て、言ふ程の不思議は無い、しかし古來數十萬の朝鮮人が日本に移住したが、夫れ等は皆在來の日本人と雜婚し、同化しきつて仕舞ひ今日では朝鮮色といふものを失つてゐるのに八瀬大原は猶種々の點に於て朝鮮色を残してゐるのが珍である、即第一に女が頭に物をのせて運ぶこと、その凡てが確かに朝鮮系統であるといふ證據は頭上に物をのせる簪の臺輪(甲子夜話)が全く朝鮮のタイリリといふものと全く同じ、第二に帯を結ぶ時にコマ結といふ結切りにする。コマは高麗である、第三に大窟を祭る風習がある。第四に男子は頭髮に推髻をつくる、第五に牛を扱ふに慣れてゐる、第六に村の長者をワンジョウといふのは、朝鮮のワンヂャン(阮長)でないか、第七に八瀬の釜風呂は朝鮮の蒸幕である、第八に八瀬大原女はキョタの盤をうりに出た日本のキョタは朝鮮から傳はつたものである、第九に大原女の前カケは朝鮮女のチャムの類である。要するに八瀬大原は古き朝鮮の團體移住民である。移住の時代は天智天皇時代ならんか。その移住民が何等かその國から傳來した技能を以て朝廷に御用を移めたものであらう。註曰く八瀬には後醍醐天皇の御輪旨といふものがあるが、今村氏はさうしたものに無

關係に彼我の風俗の類似を對比されたのである。今日ではこゝに記されてある習慣の二三は既に無くなつてあるが、翁草に都に近けれど風俗異國人に近しとあるのを注意されての立言である。但しこうした風俗について八瀬のみでなく廣く日韓風俗の類似を調べてみたら面白い結果になると思ふので、摘録して讀者の注意を喚起しておく。(F)

新著紹介

○播磨風土記物語

松岡靜雄述 四六版本文索引共二五
一頁 昭和二年十月 東京駿河臺刀江書院發行
定價金一圓八十錢

播磨風土記を分解して傳説、神、人、地誌、住民、風俗の六項に關するものを解釋したものである。この風土記は民俗學的の記述に富んで居るもので従つてこの物語も地理的の事項は少なく民族學的の考案である。判讀し難い箇所を合理的に讀み直した簡単な考證が註として挙げられて居て、栗田氏の標註古風土記などの及ばなかつた點を明かにして居る。我國の古い地理書として風土記を考察するものには參考になる點の多い著書である。(N)

○航海の語

米村少將著 科學知識普及會發行
定價貳圓五十錢

海軍少將米村末喜氏が、學術講話會で講演しられた筆記を訂

摘 錄

正したもので、章を分つこと七、水路圖書、水路の器械、水路の設備、航海法、船の歴史海路等に關して極めて常識的に明瞭に書いてある、菊版一七四頁圖版八十五圖、世界航路圖と、東京灣の海圖二葉を附録にしてある、測深の方法、其器械、コムパスなどの知識から天測の方法を明にし、世界船舶界の現状を説明したものである、科學知識の普及としてこの上ない指針だと思ふ。(藤田)

○土木建築工事砂利

理學士 江畑弘毅著
菊版本文四〇六頁、昭和二年十月、工業雜誌社發行
定價四圓八拾錢

應用地質學の開拓、殊に所謂鑛床學以外の土木建築に關する方面への地質學の進出は寧ろ最近の出來事である。地中に隧道を穿ち、地上に建築物を築く爲めに地質學の必要なるは論を俟たない。然し之れにも増して必要な事は良き建設材料を廉價に得る事である。殊にコンクリートの利用が盛んなるにつけ、種々なる道路の擴張が盛んなるにつけ、益々其の必要を感じらるるのは本書の如き著書である。著者は地質學出身の新進であつて卒業後復興局にあつて全然砂利の事のみを研究して居た爲めに工科出身の人に企畫し得ぬ特徴をも多少示して居る。然し殊に讀者に取つて力強く感ずるのは實に其の親切を極めた記載であつて、凡そ砂利を採集し、賣買し、利用する事に關しては細大洩さず記載してある。甚だ卑近なる比喩ではあるが實に本書一冊あれば砂利屋を開業する事は易

四九

六五